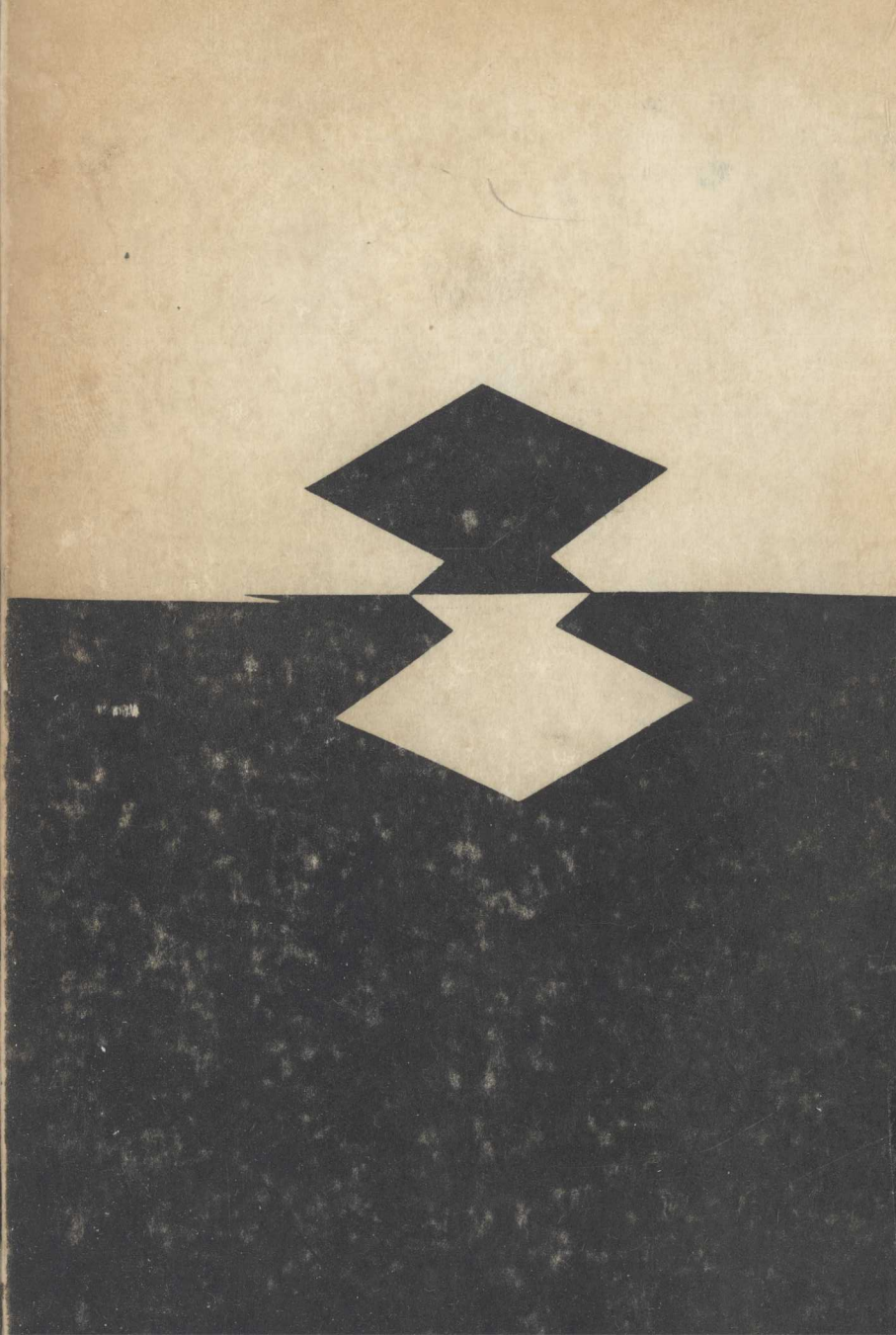




池波正太郎

池波正太郎

新潮社版

忍者丹波大介

昭和四十年八月二十五日 印刷
昭和四十年八月三十日 発行

定価 三八〇円

著者 池波正太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(廻)二三番(大代)
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。

目

次

第一部

白い密使……………八

耳塚屋敷……………三

伏見騒擾……………四

甲賀命令……………四

大谷屋敷……………三

襲撃……………七

豪雨……………一〇

回復……………二〇

決意……………二三

第二部

上田城にて……………一四

忍びの血……………一三

後	氷	別	関	戦	岐	戦	呼	夏	戦	追
			ケ		阜・赤					
記	湖	離	原	局(二)	坂	局(一)	応	草	雲	行
.....										
二六五	二五九	二五五	二四五	二四一	二三三	三三六	三六六	三〇七	一九四	一七八

装
幀

山
崎
百
々
雄

忍者丹波大介

第一部

白　い　密　使

一

豊臣秀吉が、関東の北条氏を討滅して、ついに天下統一を成しとげたとき、朝鮮国王からも、「日本の帝王となられ、まことに、めでたいことである」

国書が、とどけられた。

「ふむ……。後は、わしが生涯をかけた夢を見るまでじゃない」

秀吉は、大満足であった。

秀吉生涯の夢というのは、朝鮮から明国（中国）天竺（インド）へかけての、大陸経営についての計画である。

一説には、天下統一を眼前にして急死をした織田信長が、

「わしが目の本を統べたのちには、海をへだてた彼方に城を築きならべ、異敵にそなえねばなるまい」

その寵臣であった秀吉にもらしたともいう。

ともあれ、秀吉の大陸制覇については、一概に、彼の夢

を無謀だと嗤うわけにもゆくまい。

秀吉は、その天衣無縫な性格ゆえに、得をもし損をもしている。

秀吉には、それなりの理想もあり信念もあって朝鮮出兵を決意したわけで、

「三百年前に、蒙古が我国へ来寇した一事を、われらは決して忘れてはならぬ」

と秀吉は、石田三成などへ、しばしば語りきかせたものだ。

だが、秀吉は樂觀しすぎて強引な朝鮮征討へ突入し、ついに、その無謀を誘われる結果となった。

しかし、秀吉のみを嗤うことはできない。

大陸経営については、その四百年後の近代日本が、ついに成しとげられず、秀吉以上の大失敗をとげているのだから……。

豊臣秀吉は、三人の男子をもうけた。

一人は若いころのことだが、これは早世し、その次の鶴松も早死をしている。

最後に、豊満艶麗なる側室・淀君の腹に宿したのが、秀頼である。

この愛児出生と朝鮮征討と、おのれの病患とを、秀吉は同時に受けいれねばならなかった。

すでに、秀頼出生のころから、だれの目にもわかるほど、秀吉は烈しい喘息になやまされていた。

自分に対する実直無類な性格と、その底のふかい実力を
知りつくした秀吉が一目も二目もおいていた徳川家康の重
臣・本多正信が、或夜、ひそかに、主の家康へ、
「太閤殿下は……」

何か、ささやいた。

秀吉の気管が、かなりの病患に犯されていると、ささや
いたのである。

「うむ……」

家康は、かすかにうなずいたのみであった。

秀吉は秀吉で、三万に及ぶ金瓦をまとった豪壮絢爛たる
伏見城に朝鮮の講和使節を引見し、日本の、いや秀吉みず
からの威風をしめさんとした。

京都市中の東面をかこむ東山地望につらなる台上の伏見
城は、眼下に宇治川をのぞみ、山科と京都両盆地を左右に
見下す突端にあった。

王城の地・京都を制す天下人の居城として、まったく申
し分のない環境をそなえた城である。

けれども、再度にわたる朝鮮征討の無惨な失敗は、いた
ずらに莫大な戦費を海の彼方へ捨てたのみとなり、同時に
(天下さま)の秀吉は、六十三歳の生涯を終えた。

肺患ともいい、瘡だともいわれているが、とにかく病勢
が急激にあらたまり、秀吉を打ち倒した。

ときに、秀吉の遺子・秀頼は、わずかに六歳。
[秀より事、なりたち候ように、此かきつけのしゆとして

たのみ申候。なに事も、此ほかは、おもいのこす事なく候
……]

と、涙あふるるままに、恥も見得もなく、死の床にある
秀吉は、この幼い世つきにかけた狂おしいばかりの愛情
を、徳川家康をはじめ長老たちに披瀝し、愛児の将来をた
のみこんでいる。

秀吉亡きのち、果して天下は騒然となった。

朝鮮から帰還した出征将士は、永い戦旅にやつれ、しか
も戦果は、ほとんどなかったといってよい。

このとき、長老の一人である徳川家康の威望は、にわか
に光彩をおびた。

朝鮮への出兵もせず、東国一帯に君臨する大名として、
家康の蓄積した実力をみとめぬものはない。

秀吉歿した翌年——慶長四年となって、新たな天下統一
を目ざし、諸国大名たちの勢力は、二つに割れた。

一は、いうまでもなく家康を中心にしたものであった。
一は、故秀吉の寵臣・石田三成が醸成しつつある勢力で
ある。

そのころ、石田治部少輔三成の居城は、近江の佐和山(彦
根市)にあった。

二

石田三成の筆頭家老・島左近勝猛の屋敷は佐和山城内・

三ノ丸にあり、

「三成にすぎたるものが二つあり。島の左近と佐和山の城」

などと世にうたわれた威勢を屋敷構えに歴然と見せ、左近は、伏見屋敷に暮しつづける主・三成と佐和山との間を月に何度も馬を駆って往来している。

その島左近が、

（内府（家康）の首は、いまのうちに掻いておくべきだ）

独断で決意したのは、慶長四年（西暦一五九九）一月八日の夜であった。

眠る前に、左近は異国から渡来した赤い葡萄酒をギヤマの盃にくむのがならわしであったが、この夜、ただひとり、寝所の褥の上で盃に手をかけた瞬間、徳川家康暗殺の断行を決意した。

左近は、控えの間の小姓に、

「半蔵をよべ」と、命じた。

五十二歳になっても島左近の体軀は、筋肉の間に鉄線張りつめたような鋭いたくましきを感じさせる。小鼻の張った長い鼻は自信をはこり、燭台の灯に光る針のような両眼のかがやきは、決断の意力そのものであった。

やがて、廊下に、侍臣・柴山半蔵の顔があらわれた。まだ自邸へ戻らなかつたとみえる。

「これへ……」

左近は、褥へ半蔵のひざが乗りかかるほどに近寄せ、「夕刻、伏見の殿より使者が到着した。明夜、内府は伏見

を発ち、大坂へ向われるそうな」

と、半蔵を凝視した。

「は……」

半蔵の眠たげな眼が、左近を見上げ、

「小五郎を、よび寄せましようや？」

打てばひびくように、きき返した。

さすがに、左近が片腕ともたのむ柴山半蔵である。

「うむ」

満足げに左近がうなずくや、半蔵は白髪の頭をうつ向けたまま床ノ間へ近づき、その柱の下方へ手をかけた。

手かけた床ノ間の柱の箇所が、からりと剝がれた。柱が黒い穴をあけている。その穴へ、半蔵が、ふところから取り出した鉛の玉をしずかに落しこんだ。

鉛玉が落下する間をおいて、かすかに、穴の底が水音をたてた。

三ノ丸の台地上にある島左近邸のまわりには土居がめぐらされ、その下には濠の水が流れこんでいる。

鉛玉をのんだ水は、その濠水と通い合っており、この水音は連絡を待つ者への呼笛であった。

「ごめん……」

柴山半蔵が柱の蓋を閉じ、廊下へ出て行きかけると、島左近が、

「待て、おぬしもここにおれ」と、いう。

別にさからいもせず、半蔵老人は主^{あるじ}の傍へ、ひっそりうずくまり、主と共に、黙然と、あらわれるものを待った。

どれほどの刻が流れたろう。

しめきった障子や襖が、いつ開き、いつしまったものか、左近も半蔵も、まったく気づかぬうちに、寝所の片隅へ黒い影が、にじむように浮き出した。

「お……小五郎か」

左近は、いつもながら小五郎の忍びの術に瞳目^{どうも}せざるを得ない。

声もなく空気のように、部屋の中へ流れこんで来たこの男は、岩根小五郎といい、卓抜の技倆をもつ甲賀忍者であった。

小五郎は——島左近が石田三成に仕える以前、筒井順慶や故豊臣秀長（秀吉の弟）の家来だったところからの知己である。

左近が、石田三成に見出されたとき、三成は四万石を領していたが、このうち一万五千石という破格の高禄を左近に気まよよくあたえ、

「左近ほどの武士が、ようもそちのもとへころげこんでくれたものじゃと思うていたが……それでは、あまり主従の差もないほどの高禄ではないか。ようも思いきったものよな」

と、豊臣秀吉も、さすがに驚嘆した。

三成が左近を遇したように、左近もまた、柴山半蔵と岩

根小五郎を遇するに遺憾^{いかん}はなかった。

この夜も、島左近は、ずっしりと重い金包みを小五郎へあたえ、

「よいようにいたしくれい」

と、いった。

黒い影は、うなずきもせず金包みを、ふところへおさめた。

「内府の御座船に、そちの手の者がひそませてあるな。何名じゃ？」

ときく左近へ、小五郎が、

「水夫となつて三名ほど……」

「ふむ……明夜、内府が船にて大坂へ向う」

「は……」

「家康の命を絶つてくれい」

すると、いささかの躊躇^{ちゅうちよ}もなく、岩根小五郎は一礼し、命をうけて廊下の闇へのまれ去った。

島左近の決断は、あまりにも重大すぎた。

だが、あえてこれを行うことの必然さが、左近の信念でもあった。

「わしは、いま決意をし、いま命を下した。ためらいは露ほどもなかった。このことを知るものは、わしと半蔵と小五郎のみじゃ。これが大切なことよ。明智光秀が織田信長公を本能寺に討ちとられたのも……」

決断と実行の関連に間髪のためらいがなかったからだ、

と、いうのである。

伏見にあり、反徳川派の勢力固めに奔走しつづつある石田三成は、わが家老の、おどろくべきこの夜のありさまを、まったく知るべくもなかった。

明後十日に、豊臣秀頼は伏見から大坂城へうつることになり、自分をふくめた諸大名たちも、それぞれ大坂表へ参集するむねを、三成は左近に知らせ、徳川家康は秀頼に先発し明夜に伏見を発つことも、ついでに書きそえたまでである。

「無謀かと見えようが……今ならよい。内府はどこまでも内府であり、天下びとではないのだからな」

病根には劇薬もよいとつぶやき、島左近は柴山半蔵に「退つてやすめ」と、いった。

三

その夜ふけに、柴山半蔵は追手門外の自邸へ帰り、一通の書状らしきものをしたためたのち、下女の於志津を居間へよんだ。

隔日ほどの習慣で、半蔵の肩をもむのは於志津にきめられていた。

近江の冬は寒さもきびしいが、半蔵の居間には大きな炉が切っており、燃える火の色が灯のかわりともなつて部屋いちめんにゆらいでいた。

妻も子もない老いた半蔵にとって、一年ほど前に若狭から来た下女の於志津が体中をもみほぐしてくれることは、何よりの愉楽らしい。

於志津が来ると、半蔵は、ずんぐりとした体軀を炉端に横たえた。

於志津は十七歳だという。若狭の漁師の子に生れたが、いまは孤児で、この少女を柴山家へ世話したのは、佐和山城下の魚商人であった。

「むウ……よいころもちじゃ」

肩をもまれつつ、半蔵が何気なく、したためたばかりの書きつけをひろげた。ひろげたまま、於志津にもませつつけている。

もむ手を休めることなく、於志津は半蔵の肩ごしに、その書面を見つめた。喰い入るように入り、まばたきもしない。

書面は、次のようなものであった。

島左近さしつかわしたる忍びの者の、明夜、ごさ船へ夜討ちあり。

ころつけれ候えかし。

やがて半蔵の手がのび、書きつけをまるめ、これを炉の火中へ投じた。そして半蔵は両眼をとじて、ささやいた。「よいな」

於志津は、無言でうなずいた。

野菊のような彼女の小さな面は、ほのかに汗ばんでいた。

主の肩をもみ終えてから、於志津は一語も発せず部屋を出て行った。

夜が明けたときには、於志津の姿が柴山屋敷から消えていた。

家来や女中たちが、これに気づき、半蔵に知らせると、半蔵は舌うちをし、

「よう面倒を見てやったつもりじゃが……親なし子ほど気まぐれなものはない。人の子には何につけ、親があり家のうてはならぬものじゃ」

さらにつけ加え、

「夜のたのしみが、これで消えたわえ。子どもながら、指の力のひどくつよかったが……」

残念そうにいったが、この声には、おかしなほど、実感がこもっていたものだ。

そのころ、於志津は、佐和山から六里余もはなれた武佐のあたりを走っていた。

笠を深くかぶり、筒袖の裾も短かい着物に身をかためた彼女は、街道を外れた林や耕地の中の道をえらび、飛ぶように走りつづけている。とても十七の少女には見えなかった。六里を走って、いささかも足に疲れを見せず、笠のうちの双眸は、むしろ、すさまじく光っている。

武佐をすぎると、於志津は京へ向う街道へ出て、やや歩調をゆるめた。

於志津が、野洲川のほとりまで来たころ、すでに陽は高かった。

二日ほど前に降った雪が山々に残ってはいたが、くまなく晴れたった青空に輝く陽光は、川の水面にきらめいている。

川辺りへ来て、於志津は水を口にふくんでは何度も吐き出し、それから腰の包みをひろげ、玄米のにぎりめしが二つあるうちの一つを食べはじめた。笠を取ろうとしな

い。川幅のひろい対岸の陽だまりに、これも何やら、ほそほと口にはこんでいる旅の老婆がいる。

乞食といってもよい汚れ果てた風体で、やせこけた小さなからだを枯れ柳の根もとに投げ出し、物倦げに口をうごかしていた。

玄米を噛みつつ、於志津は一度、ちらりと彼方の老婆へ視線を投げたが、やがて立ちあがり、ゆっくりと街道へ出て行った。

老婆は、この於志津のうごきに目をやろうともせず、河原にうずくまったまま、何か、しきりに両手をうごかしていたようだが……。

そのうちに老婆の手の中から、羽ばたきをたてて空に舞い上ったものがある。

一羽の鳩であつた。

四

鳩は「つかいばと」である。

つまり伝書鳩のことだが、そのころの日本には、この鳩の利用価値はまだ微少なものにすぎぬといつてよい。

「この婆も、もう、むかしの様に走ることが出来なくなつた。使ひ鳩は婆の足よ、手よ」

いつか、この七十余歳の老婆が、こうもらしたことがあつた。

老婆の手から飛び立つた使ひ鳩は、街道を進む於志津のはるか頭上を越え、京の方角へ向つて飛び去つた。

草津をすぎると、於志津は、また間道をえらび風を切つて走り出した。

陽は宙天にある。

これより先、使ひ鳩は帰巢すべきところへ到着していたが、於志津の足も速かつた。

陽がかたむく前に、彼女は逢坂山の小道をぬけ、山科盆地へ入つていた。佐和山から約十八里を走破したのである。

於志津の目ざすところは、伏見であつた。

伏見城下の徳川家康屋敷にいる家康の重臣・本多佐渡守正信のもとへ、於志津は急いでいる。

彼女は、主人の柴山半蔵が島左近と主従二人のみが知る家康暗殺の計画を、半蔵の命によつて家康の耳へ告げようとしているのだ。しかも陽が落ちぬうちにである。

つまり、越後の牢人だつた身の上を島左近に拾ひあげられて四年。その間に、主の左近と肝胆を照らし合う間柄となつたほどの柴山半蔵は、左近から受けた恩顧と信頼を、このとき見事に裏切つたことになる。

まわりくどくいうまでもない。

柴山半蔵は、徳川家の老臣・本多正信が島左近のもとへ潜入させておいた間者なのだ。

於志津は栗栖野に密生する竹林の一つへ入り、そこで呼吸をととのえた。

陽は東山の山なみに消えたが、空はまだあかるい。

山の向う側は京の都であつた。

この山裾を南へ走りぬければ、あと二里ほどで伏見城下へ達する。

陽がかたむきはじめると寒気もきびしい山科の野であるが、於志津の顔もからだも、汗と砂埃にまみれつくしていた。(ここまで来れば、もう大丈夫……)といった安堵のおもひが、彼女の面をゆるませた。

於志津は竹林の中の土に立つたまま、急に眉をしかめ、あたりを注意ぶかく見まわしてから双肌をぬぎ、この村へ駆けこむ前に小川でぬらしてきた手ぬぐいをひろげ、頸すじや胸や、腕をぬぐつた。